

# 平成二十三年歌会始御製御歌及び詠進歌

葉

御製

五十年の祝ひの年に共に蒔きし白樺の葉に暑き日の射す

皇后陛下御歌

おほかたの枯葉は枝に残りつつ今日まんさくの花ひとつ咲く

皇太子殿下

紅葉する深山に入りてたたずめば木々の葉ゆらす風の音聞こゆ

皇太子妃殿下

吹く風に舞ふいちやうの葉秋の日を表に裏に浴びてかがやく

文仁親王殿下

山峡に直に立ちたる青松の嫋やかなる葉に清けさ覚ゆ

文仁親王妃紀子殿下

天蚕はまてばしひの葉につつまれてうすき緑の繭をつむげり

正仁親王殿下

中庭のにしきぎの葉は赤々と朝の光に燃えるがごとし

正仁親王妃華子殿下

新年のおせち料理にそへてもる南天の葉はひきたちてみゆ

崇仁親王妃百合子殿下

ほどけしも巻葉まきはもありて今年竹みどりさやかにゆれやまぬかな

彬子女王殿下

手に取りし青きさかき葉眼にしみて我が学び舎に想ひはせたり

憲仁親王妃久子殿下

新年にひとこにめでたく飾ゆづりはる櫛ゆづりはの葉に若きらの夢たくしたり

承子女王殿下

葉脈のしをり見つけし古き本思ひではめぐる初等科時代に

典子女王殿下

雲のなき冬空さえて行く人の落ち葉ふむ音さやかに聞こゆ

絢子女王殿下

風吹きてはらはらと舞ふ落葉手に母への土産と喜ぶをさな

御製  
五十年の祝ひの年に共に蒔きし白樺の葉に暑き日の射す

御成婚五十年に当たる平成二十一年の立春、天皇陛下は皇后陛下と御一緒に御所の近くに植えられた白樺から種を採り、お蒔きになった。この御製は、その種から育った若木の葉に夏の暑い日の光が当たっている情景をご覧になって詠まれたものである。

皇后陛下御歌

おほかたの枯葉は枝に残りつつ今日まんさくの花ひとつ咲く

春に咲く花芽を守るように、枯葉を枝に残したまま冬を越したまんさくの木に、早春、初めての黄色いひと花が咲いたのをご覧になった時の喜びをお詠みになった御歌。

皇太子殿下

紅葉する深山に入りてたたずめば木々の葉ゆらす風の音聞こゆ

このお歌は、数年前の秋、皇太子殿下が東京近郊の山に御登りになられた折、山深い山中で、紅葉した木々が木漏れ日に美しく映える中、木々の葉を揺らしながら吹き抜ける風の音が聞こえていた情景をお詠みになられたものです。

皇太子妃殿下

吹く風に舞ふいちやうの葉秋の日を表に裏に浴びてかがやく

このお歌は、昨年十一月終わり頃、皇太子妃殿下が愛子内親王殿下の御通学になる学習院初等科にいらっしやいました折に、校庭に立つ一本の大きないちやうの木の黄金色の葉が、吹いてきた風に舞い、秋の日を受けてかがやきながら散りゆく美しさにお心を動かされて、お詠みになられました。

文仁親王殿下

山峡やまかひに直すくに立ちたる青松の嫋やかなる葉さやに清さやけさ覚ゆ

一九九七年、秋篠宮同妃両殿下は、ブータン国を公式訪問されました。標高がおよそ二四〇〇メートルという高地にあるブータン国の首都ティンプーには、青松林が広がっており、まつすぐに立つ青松とその嫋やかな葉の色彩が高地の景色とよくあっていました。

秋篠宮殿下は、青松の葉が風にたなびいている様子をご覧になった時の爽快さを想い起こされて、このお歌をお詠みになりました。

文仁親王妃紀子殿下

天蚕やままゆはまてばしひの葉につつまれてうすき緑の繭をつむげり

悠仁親王殿下は、昨年五月下旬に皇后陛下からきれいな緑色の天蚕を頂かれ、まてばしいの葉を与えて育てられました。毎日、天蚕が成長する様子をご関心をお持ちになりながら観察され、食べる葉が少なくなると、新しい葉の茂る枝を与えられました。二週間ほどして、天蚕は、何枚かのまてばしいの葉に包まれるように、美しいうす緑色の繭を作りました。

秋篠宮妃殿下は、悠仁親王殿下がお世話をされた天蚕が美しい繭を作った時の情景を、このお歌にお詠みになりました。

正仁親王殿下

中庭のにしきぎの葉は赤々と朝の光に燃えるがごとし

正仁親王妃華子殿下

新年のおせち料理にそへてもる南天の葉はひきたちてみゆ

崇仁親王妃百合子殿下

ほどけしも巻葉まきはもありて今年竹みどりさやかにゆれやまぬかな

宮邸のお庭にある竹をご覧になりお詠みになったものです。

彬子女王殿下

手に取りし青きさかき葉眼にしみて我が学び舎に想ひはせたり

昨年（平成二十二年）二月、神宮にご参拝された際、英国オックスフォード大学マートン・コレッジのご留学を終えられたことを実感してお詠みになられたものです。

憲仁親王妃久子殿下

新年にめでたく飾かるは楨はの葉に若きらの夢たくしたり

「ゆずりは」は「讓葉」とも書き、別名を親子草といい、新しい葉が出てから古い葉を落とします。

昨年（平成二十二年）九月、第三女であられる絢子女王殿下もご成人となられました。新年を迎えることになぞられて、「ゆづりは」が飾られるさまを若い世代への思いと重ねて詠まれたものです。

承子女王殿下

葉脈のしをり見つけし古き本思ひではめぐる初等科時代に

お部屋を片付けていた際、子供の頃に読んでいらした本を開いてみたところ、通われていた学習院初等科時代の文化祭で作られた葉脈のしおりが挟まれていたことから、心温まるお気持ちになられたことを詠まれたものです。

典子女王殿下

雲のなき冬空さえて行く人の落ち葉ふむ音さやかに聞こゆ

学習院大学の構内で毎日の様にご覧になっていた風景を詠まれたものです。

絢子女王殿下

風吹きてはらはらと舞ふ落葉手に母への土産と喜びをさな

絢子女王殿下には、現在城西国際大学で学ばれておられますが、この歌は、昨年（平成二十二年）、大学の実習先である保育所でお会った微笑ましい光景をそのまま詠まれたものです。

召人 安永露子  
山茶花の白を愛した母思へば葉と葉のあひのつばみ豊けし

選者 岡井 隆

銀杏落葉ふかくつもれる坂道をのぼりて行かな明日の日のため

選者 篠 弘

白樺の若葉をぬらす昼しぐれ書き出さむわがことば立ちくる

選者 三枝昂之

哀樂の年々を積みあゆみゆく銀杏並木の今年の黄葉

選者 永田和宏

青葉木菟が鳴いてゐるよと告げたきに告げて応ふる人はあらずも

選 歌 (詠進者生年月日順)

鳥取県 森本由子

夕風ぎを柿の若葉に確かめて灰七十キロ無事に撒き終ふ

兵庫県 井上正一

電源を入れよと妻に声かけてわさびの苗葉に液肥を放つ

山口県 岡本義明

草の葉の切れ端のこるシャワー室妻は夏日の草を刈りしか

カナダ国 栗津三壽  
ブリティッシュコロンビア州

妻の里丹波の村の山椿カナダに生ひて葉をひろげゆく

茨城県 丹波陽子

一字一字指しつつ読みぬ木簡の万葉仮名の「皮留久佐乃皮斯米」

東京都 吉竹 純  
背丈より百葉箱の高きころ四季は静かに人と巡りき

東京都 上田真司  
ささやかな悲しみあれば水底に木の葉が届くまで待ちぬたり

京都府 桑原亮子  
霜ひかる朴葉拾ひて見渡せば散りしものらへ陽の差す時刻

静岡県 中村玖見  
駐輪場かごに紅葉をつけてみるきみの隣に止める自転車

兵庫県 大西春花  
「大丈夫」この言葉だけ言ふ君の不安を最初に気づいてあげたい

佳 作 (詠進者生年月日順)

茨城県 竹川 浩  
檜の葉を日除けがはりに背にくくり父と田草を引きし日おもふ

神奈川県 淡野美登里  
高山寺を降り来る径の冬苺葉裏の朱き実を一つ食ふ

静岡県 内山美智子  
ゆづり葉の美しい朝献体の証書届きぬ A 〇〇七六

静岡県 石川すづ子  
湯気のたつ向かふに母は青い葉をくるつとまるめちまきつくりぬ

鹿児島県 榎田満洲雄  
おのづから生え来し枇杷に葉が繁り庭の一樹に仲間入りする

福岡県 村上智代子  
夜をこめて茶葉をもみゐる工場の灯りが見ゆる畑へだてて

福井県 児玉渥美  
積み置きし落葉を又も切り返し春の堆肥に腐熟を急かす

和歌山県 木寺俊爾  
直売の量採り終へて妻とふたり枇杷の畑の葉陰に憩ふ

兵庫県 大谷睦雄  
消毒の匂ひの残る飼葉桶しづかに高く夏の雲湧く

愛知県 副松悦子  
おにぎりがよく似合ひさう子のくれし朴葉かたどる萩焼の皿

茨城県 七森たまえ  
雉鳩の番ひを宿す楠はぐんぐんぽつぽう常葉を伸ばす

岡山県 松岡英子  
堰切れれば落葉かき分け棚田へと水の道ゆく水は競ひて

静岡県 円山幸子  
理科室で交代に観た葉脈はまるや楕円が入り組んでゐた

大阪府 東野登美子  
食べられる葉とさつでない葉を知つてゐる母にはひもじい時代があつた

神奈川県 谷村梨紗  
子供ぢやない大人でもない葛藤はキラキラ青い若葉と似てる

大阪府 中村貴晶  
祖父の家帰れなかつた盆休み葉書を一枚送つてみよう

福岡県 浅原健一郎  
風吹けば同方向になびく葉の中に逆らふものはゐないか